



東京駅復原へ、工事の手は止めない。40万人の足も止めない。

“赤レンガ駅舎”の名で知られる東京駅丸の内駅舎。私たち鹿島建設はいま、この建物を1914年創建当時の姿へと甦えらせる、保存・復原工事を共同企業体で進めています。約100年という歴史のなかで、無数の出会いや思い出が詰まった場所。いまある建物とそこに込められた想いを「保存」し、創建時の姿へ「復原」するということ。私たちもまた、特別な想いを胸に、工事を進めています。これまで松杭で支えられていた駅舎の基礎を再構築する、日本最大規模の免震化工事は、全長約335m、総重量約7万トンもの建物をいちど鉄骨支柱で仮受けし、地下躯体を構築した後、地下全体に配置された352基の免震装置に荷重を移して完了します。保存・復原した東京駅を未来へつなぐため、まさに基礎となる免震化工事。行きかう人々の足下で、今日も工事は着々と進んでいます。

復原工事によって半世紀ぶりに復活を遂げるのは、戦災により失われていた3階より上の部分、そして駅舎のシンボルであった南北2つのドーム。貴重な文化遺産を守るために、現存する駅舎は可能な限り保存・活用し、創建当時の姿へと

戻します。ドーム内部、外壁、屋根の装飾も伝統職人や専門家の特殊技能によって再現されます。現代技術のなかで失われつつある技術を見直し、時間と手間をかけ、建物だけではなく技術や文化を継承する。そのこともまた、プロジェクトの大切なコンセプトなのです。

工事中の東京駅は、1日の乗車人数約40万人、列車の運行本数約3,600本というターミナル駅。この機能を維持しながら行われる「居ながら」の保存・復原工事は、もちろん利用者の妨げにならぬ、高い安全性が求められます。乗降客の通行範囲や隣接箇所での作業は、終電から始発までの短い時間に限られるうえ、狭いので大きな重機は使えず、人の手によって行われます。最大1000名の作業員による、24時間体制の保存・復原工事。完成は2012年。100年という歴史を支え、次の100年に継承する。新しいものをつくるだけでなく、価値ある建物を保存し、未来につないでゆくことも、建設会社としての誇り。鹿島はいま、東京駅の地下で、7万トンの駅舎よりも重い、歴史と文化を支えています。



1914年創建時の姿に復原される東京駅丸の内駅舎・完成予想図（2012年完成予定）

100年をつくる会社  
**in 鹿島**